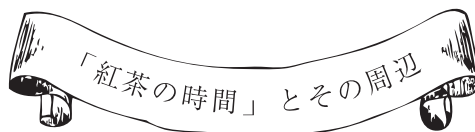


きもちは、 言葉を さがしている



第44話

水野 スウ

「うたごえ」のこと

「うたごえ」という市民の活動（うたごえ運動と呼ぶ人もいます）が全国にあります。単に、歌を歌うだけのグループではなくて、自分たちで歌詞を書き、曲もつくり、それを合唱し、その中には沖縄や福島之歌、原発や原爆の歌、平和や憲法の歌もたくさんあるらしいということを、以前から聞いてはいました。

私が実際にうたごえを体験したのは、今から数年前のこと。うたごえ祭典と呼ばれる全国大会が石川で開催された時、うたごえの人たちが大勢、全国からみえて、数々の私の知る歌、知らない歌、オリジナル曲を発表し、そのすばらしい歌声と見事な歌いっぷりに感動したものです。その際、友人から声をかけられ、思いがけず私もその日限りの石川大合唱団に混ざって、梅原司平さんの歌「折り鶴」を大きなステージで一緒に歌うという、貴重な経験をさせてもらいました。

うたごえに関して、それ以外ほぼ何も知らない私だということに、どういうわけか、2021年度全国うたごえ創作講習会の講師のご指名を受けました。「うたごえ創作講習会」というのは、全国からうたごえ仲間が泊りがけで集まり、めいめいが作品を発表し、コメントやアドバイスを受け、その場でグループをつくって歌詞に曲をつけていく、という歌づくり合宿のこと。その中でお話の出前と、メンバーの作品への感想を言ってください、というご依頼です。

毎年、主催地を変えながら開かれていて、今年は福井に集まって2日間の合宿がおこなわれる予定だったところ、コロナの感染拡大真っ最中と時期が重なり、じかに顔を合わせての創作作業は難しくなっていました。

講習会の中心を担う、愛知の藤村記一郎さんはじめ創作部会の人たちは、それでも今できる最善のこと——ともに歌をつくることはできなくても、せめて講演会と作品発表と講評会だけでもしようと、急遽Zoomで2日にわけて講習会を開くことを決定。

それから2週間、創作部会と福井のうたごえメンバーたちは怒濤の日々を経て、必死の準備でぎりぎり当日にこぎつけたそうです。私も、ドキドキしながら福井に行きました。今回のマガジン原稿は、そんなうたごえ創作講習会の報告記です。

なかじまてつえん 中嘉哲演さん講演会

プログラム1日目は、小浜の古刹、明通寺^{こきつ みょうつうじ}ご住職である中嘉哲演さんの講演会。哲演さんは、志賀原発の反対集会でよく能登にいられていて、私も何度かお会いしているお坊さまで。私が福井に伺うのは2日目なので、この日は自宅から、Zoomでお話をお聞きしました。

哲演さんは、高野山の大学時代のご自身のことを、文学や哲学に惹かれ、戦争と平和には関心外の若者だった、とふりかえります。けれど、強引な友人に平和行進へと連れ出されたとき、一人の被爆者と出逢い、その方の地獄の体験を聴き続けたことから、被爆者の支援に関わるように。小浜在住の被爆者を探し訪ね歩いて、原爆症専門の医師につなげる活動をしながら、1994年に被爆者援護法ができるまでの26年間、小浜の一軒一軒を訪ねて托鉢を続けられました。

原発の反対運動と関わりだしたのは、小浜に原発建設の話が持ち上がった1971年から。そのときすでに福井には7基も建っていたのに、自分ごとになったのはわが町にできるかもと知ってからなんです。と哲演さんのお話はどこまでも謙虚です。固い信念をお持ちで、揺らがらない。原発に対する抗議の断食はすでに8回にも及びます。

哲演さんたちが、美しい若狭を守ろう！と立ち上げた「原発設置反対小浜市民の会」の不断の努力もあって、小浜では原発の受け入れを断念させてきたけれど、その周辺、美浜にも高浜にも大飯にも原発が立ち並んでしまいました。福井県内の原発は、嶺南^{れいなん}と呼ばれる地域にある若狭に集中して15基。福井市などのある嶺北^{れいほく}と比べて4分の1弱の人口しかない嶺南に、原発が集中して建てられてきたのです。そして、そこでつくられる大量の電力を消費するの

は、京阪神に住む都会の人々です。

2011年の福島原発事故の後、ようやく7基の廃炉が決まったものの、それでもまだ8基あります。しかも美浜3号、高浜1、2号は40年も動かしてきた老朽原発。一時は慎重姿勢を見せていた県知事と県議会でしたが、再稼働させるなら一発電所につき25億円の交付金、と国が強く動き出したとたん、ころっと態度をかえたそうです。

じ たいちによ 自他一如

哲演さんのお話の後半、特に心に残ったのはこんな言葉たちでした。

——核廃棄物の最終処分場の候補地に名乗りをあげている北海道の寿都町や神恵内村、なぜこういう危険物がとんでもなく遠く離れたところでだけ問題になるのか、それをよく考えてほしい。これら廃棄物を生み出したのは、これっぽっちもその人たちではない。地元の同意さえ得れば何でもできるという傲慢さは、半世紀前から全く変わっていませんね。大量生産、大量輸送、大量消費、大量廃棄、の思想、価値観が、あらゆる分野で幅をきかせている。原発はその最たるもの。大量の電力エネルギーを生み出し、施設は過疎に押し付け、大都市圏がそれを消費する。大量消費して出た廃棄物は、若狭だけでない過疎地の原発から生じたもの、これをすべて下北の六ヶ所村に押しつける。その構造のもとに、今の都市部の繁栄があるということです。

——自己と他者との関係を仏教では、「自他一如」という。自己と自分以外の他者とは切っても切れない、つながりあって支えられて、生きている、生かされている関係、という基本が根本にある。その他者を、単に個人対個人の関係でなく、私たちと社会との関係、人類を生かしている地球環境との関係の中で見た時、自然全体の環境と私たち、人類社会が、どう調和して生きていくのが求められている時代だと思うのです。

仏教ではこれを、生きとし生けるもの、といい

ますが、欧米の市民運動の中で、生態学的倫理=ecological ethics、地球倫理=global ethicsという言葉がでてきた。倫理は、これまでは人間中心主義の関係性の問題だったが、おお、ついに欧米の市民運動でもそうになってきたか、仏教者にとっては大昔から当たり前の、生きとし生けるものの発想になってきたのか、と思った。人間一人ひとり、生きていく上に備えておかなければならない倫理性の中に、ecological ethics、global ethicsが必要とされる時代になってきたのだな、と感じています。

この日は、哲演さんのお話の合間に2つの歌が歌われました。坂村真民^{しんみん}さんの詩「あとからくる者のために」と哲演さんの詩「わが若狭^{きよ}よ」。どちらもうたごえのメンバーが曲をつけて歌にして、福井のうたごえの人たちがその場で歌って聞かせてくれました。

歌のモチより発表会

創作講習会2日目は、全国のうたごえメンバーさんたちの歌のモチより発表会と、私のお話の出前です。福井のうたごえメンバー、斉藤清巳^{きよみ}さん宅リビングキッチンのスタジオに、参加者はわずか5名。ここから全国のうたごえ仲間をZoomでつなぎ、午前と午後にわたって26作品、計4時間におよぶ歌のモチより発表会をおこない、午前の部と午後の部の合間には私がお話をする、というプログラムです。

お一人でもお二人でも、同じ空間に耳を傾けてくれる人がいる状態でお話しさせてもらえたら、という私のお願いを聞き入れてくださり、斉藤さん宅のリビングキッチンには、何本もの立派なマイクが並び、さながら機材をそろえた音楽スタジオ。そのスタジオの一角を透明なフィルムで仕切った場所が私の指定席になりました。きっとZoom越しからは、私が金魚鉢の中にいるように見えていたことでしょう。そんな状態で、歌のモチより発表会がスタートしました。

ある方は作詞の朗読、ある方は曲つきで歌い、曲があるものには一作ごと、創作部会の方がアドバイ

スをしていきます。日頃から曲づくりをしている方たちは歌詞からだけでも曲のイメージが浮かぶらしく、これにこんな曲をつけたいですね、とか、そこはこういう曲の構成にしたらどうでしょう、と具体的な指摘を次々に。

ここでの私の役割は、歌詞についてコメントすること。それを講評と呼ぶそうだけど、そういったことするのは生まれてはじめてです。歌詞集を読みながら、歌詞を書いた人がその場で朗読するのを聴き、即、感じたことを言っていく。歌詞のいいところ、ハッとさせる言葉、響いた言葉、ちょっと気になった言葉、などなど。

歌詞には、コロナあり、福島あり、辺野古の海に遺骨の混じる土砂をすてるな、の歌あり、介護施設におられるお母さんを想う歌があれば、亡き仲間を想う歌もあり。「キンメダイとサンマの恋」(詞：千葉の石塚早恵さん)は、福島の魚のかけあいのかたちをとりながら、トリチウムが流されようとしている福島の海の近未来が歌詞になっていました。現在進行中の社会、暮らし、怒りや祈り、平和への願いを反映する歌が次から次へと発表されていきます。

「ボクらのキンキュージタイ宣言」(詞：愛知の筒井佳子さん)は、コロナのドサクサを利用して、憲法に緊急事態条項をいれようとする政府のもくろみをあえて逆手にとって、「考え楽しむことがまるで悪のように／ボクらは権利をむしりとられる／ボクらは歌をむしりとられる」と今をリアルに表現します。政府が見せしめのようにあれこれと指示をするけど、いやいや、今のボクらの日常こそが緊急事態なんだから、と宣言しているところがとてもカッコいい。これにあったカッコいい曲がつくといいですね。

「アトムおばさん」(詞：福井の横井和子さん)は、40年を超えた原発の自分語りの歌。原発を再稼働させたい側はできるだけ“老朽原発”といたくなくいらしいけど、原発本人からすれば、もう心臓バクバク、からだボロボロ、もう身を引きたいよ、と言っている。それを無理やり動かしたがるのは一部の人間たちの都合だと気づかせてくれます。

「共に歩く未来」(詞曲：福井の清水雅美さん)は、社会の問題を気にして不安を感じつつも、私一人動いたって何したって、と思っていたかつての自分がいて、だけど「人のつくったものが人の手には負えない」とはっきりした時、人の目がどうこうは吹っ飛んで、知らず知らず動いていた、気づいたら仲間もいた、ともに歌っていた、と。本当を知ること、人とつながることで自分かわり、気づけばふだんの努力の12条していた、そんな歌にも聞こえました。

「老朽原発 うごかすな！」(詞：福井の山口直子さん 曲：山口さん、榊原昭裕さん)は、すごくダイレクトで、歌詞だけ見るときつそうに思えたけど、それにテンポのいい曲がついていて、「廃炉！廃炉！廃炉！」とたたみかけるコールが印象的。初めて聞く人もすぐ乗って一緒に声をあげたくなるような、勢いある集会ソングになっていました。歌詞をきいて原発の現状も学べるようにわざと硬い言葉を連ねた、という意図が生きている歌。それにしても、「はいろ！はいろ！」って言葉のくり返しが、金沢弁の「はいろ、ほやろ」(そうだろ、そうでしょ)にも聞こえて、石川県人の私には余計に愉快、痛快な歌でした。

「あたりまえの幸せ」(詞：岡山の石原みゆきさん 曲：真島優美子さん)には、「鍋を囲んで 友と語り合うこと／学校から 子どもたちの声が聞こえてくること／熱があるとき 診てもらえること／旅立つときさようならが言えること」の歌詞。どれも今、コロナで奪われていることごと。「木々がさざめくように／鳥がさえずるように」という歌詞もあって、歌を聴きながら、コロナの時代の「What a wonderful world」みたいと感じました。あの歌も実はベトナム戦争の時代に歌われていたのですよね。

長谷川義史さんの書いた「犬はえらい」(2021年5月2・9日号しんぶん赤旗日曜版に掲載)にインスパイアされて、同名の歌をつくった北海道の高畠賢さんにはもう、脱帽&爆笑。人目を気にせず堂々とうんこする犬、かたや、狭い個室で鍵かけて、音まで忍ばせてうんこする自分のはずかしさ。犬もけんかするけど、武器なんか持たないし、銃で撃てと命令もし

ない、犬はえらい！えらいなあ、と、ユーモアの中にどきっとする言葉が生きている歌でした。

まだまだまだたくさん歌がありました。うたごえの人たちの創作の熱意に圧倒されます。例年ならこの続きを、創作グループに分かれて泊りがけで歌をしあげるところ、今回はここまでしかできないのがコロナ下の現実。今後はこの作品をもとに、うたごえの仲間同士が個別にZoomやYouTubeでやりとりしながら、歌を耕し育てていくのでしょうか。苦勞した分、完成した歌を合唱で聴ける日が来た時はどんなに胸がときめくでしょう。

それにしても日本各地で、こうして歌で自分を表現し、自分の作品をまな板に載せる勇気をもって講習会に参加し、教え教えられながら歌をつくり、歌で平和を希求する人たちが全国にいること、この会に呼んでもらわなかったらずっと知らずにいたと思います。70年あまりも続いている「うたごえ」は、一人ひとりの不斷の努力で紡ぐ、壮大な平和運動でもあるのです。

きもちは、言葉をさがしている

午前の部と午後の部の合間は、私のトークタイムです。38年前に「紅茶の時間」をはじめたわけや、誰もが身の丈の自分を認めてもらいたいという願いをもって生きているんだと、紅茶を続けながら気づいていったこと。つらさを抱えてやってきた、目の前の一人ひとりを大切にするにはどうしたらいい？と悩みながら私なりに見つけた3つの方法。

その1が、来た人によこそとお茶をいれること。目の前のカップが空になったらお茶を注ぎます。

その2が、もしその人が胸のうちを話したいと思っているのなら、耳へんに十四の心、と書く「きく」で、その人を聴くこと。自分のきもちにフィットする言葉を、人はいつだってさがしたい、見つけたい、と思っているはず。話しだしてもそれをさえぎられたり、横取りされたり、否定されたりしたなら、きつとなかなか言葉はさがせない。なのでできるだけ、その人が安心できるきもちの受け皿を用意して、まっすぐな耳で聴こうと心がけています。

その3が、その人のいいところを見つけたら、言葉にして伝えること。私のいう「いいところ」は必ずしも、これこれができる、すごい、といった目に見えるDo的なことではなく、むしろその人の持っているBe的ないいところのこと。その人の誠実さ、まっすぐさ、自然体なところ、きもちと言葉があっていところ、なぜかその人といるとほっとするな、安心する、などなど。それらはみな、その人の身の丈をそのままよく見て、見つけて、伝えてきた言葉たちです。

近頃はともすれば、出した結果だけで人が評価されがちだけれど、それでは見えないものがある。人は数値化できるDoだけでできているんじゃないくて、その人が居る・在る、存在のBeもふくめた全体として、一人ひとりがいるのだから。そう思いながら紅茶を続けてきたのです。

そんな、いつものお話に加えて、この日は、ほかではあまりくわしく話さないような、うたづくりのこともお話ししました。

「ほかの誰とも 13条のうた」

15年ほど前からお話の出前先で、「あなたが言われてうれしかった言葉は何ですか」と尋ねて、その言葉を書いてもらうワークショップを何度も重ねてきました。自分にとってうれしかった、いわば身の丈のほめ言葉は、おそらく誰もが受け取っているはず、だけどふだんはそれを忘れてることが多いです。参加した方がようよう思い出して書いてくれたそれぞれのうれしい言葉が、およそ千も貯まった時、娘との協働作業で「ほめ言葉のシャワー」という小さな冊子をつくりました。今から13年前の2008年のこと。

その本づくりの過程で娘が発見したのは、「私が私であるというこの存在は、ほかの誰ともとりかえることができない」という、当たり前すぎて気づかずにいた、普遍でした。その発見を経て、憲法13条の「すべて国民は個人として尊重される」を知った娘が、これって憲法が「あなたはほかの誰ともとりかえがきかない」と私に言っているんだ、と13条を独自の視点で読み解き、その条文をやさしい言

葉に訳して朗読してくれました。

わたしは ほかの誰ともとりかえがきかない
わたしは 幸せを追い求めていい
わたしはわたしを大切 と思っていい
あなたもあなたを大切 と思っていい
その大切さは 行ったり来たり
でないと 平和は成り立たない

私はこの訳を初めて聞いた時、まるで詩のよう、歌にできたらいいな、と思いました。13条に誰もが「個人として尊重される」と書いてあること、言い換えればそれは、私もあなたもほかの誰ともとりかえのきかない存在だよ、と憲法が言っていること。そんな憲法のお話を1時間あまりした後、最後にエッセンスを凝縮したような歌で締めくくれたなら、言葉だけでは届かなかったものが、聴いている人の中に入っていくんじゃないか。そう思ったからです。

そして、彼女の訳にできるだけ添った言葉で歌詞を書き、思い浮かんだメロディをつけて「ほかの誰とも 13条のうた」という歌をつくりました。出前の最後にこの歌を歌うたび、不思議だけど毎回、語る時とは違うドアが開いてくれるのを実感しています。

「13条のうた」のCDブック

それから数年後、私はこの歌をCDにしました。CDを出すなんて、普通は歌がうまくて自信のある人がすること。私の歌声はささやくようで実に頼りないとわかっていただけ、この際、人の評価なんて気にしてられませんでした。どうしても今、CDにしなくちゃ、私にそう思わせた、ある人の発言があったのです。

そのある人というのは、2013年当時から今も変わらず副総理を続けている麻生さんのこと。「誰も気づかないうちにワイマール憲法がかわった時のように、ナチスの手口を学んだらどうか」、そうやって憲法をかえたらいいじゃないか、と^{ほの}仄めかしたのです。

私はぞっとして危機感マックス、こうなったら出

前分で細々と歌っていたんじゃまにあわない、大急ぎで音楽をしている友人に頼み、伴奏と録音をしてもらって、エイヤ！の勢いでCDをつくりました。CDケースには16ページの歌詞カードが入れると知り、そこに歌詞だけでなく、私が特に大切に思う条文についての短い文章を添えて、憲法のやさしい読み物つきCDブックに。お値段もかわいい300円。憲法ときいたら敬遠しそうな人でも、歌のCDなら受け取ってもらえることに気づき、以後このCDブックは私の「平和の名刺」となり、たくさんの人の手に渡っていきました。

Graduation

思い返すと、初めて歌に自分の言葉をつけたのは、映画「ガイアシンフォニー地球交響曲第三番」でBGMに流れていた「Graduation」。

歌っているスーザン・オズボーンさんの歌声もだけど、特にスーザンさんの書いた英語の歌詞がすばらしくて、何度も繰り返し聞いて歌詞を聞き取りました。そのメロディが実は、自分は好きになれなかった「仰げば尊し」だったと知った時の驚き。曲の出だしからの美しいアレンジのせいもあるでしょうが、私の知っていた歌とはまるで違った歌に聞こえたのです。

編曲と歌詞と歌声の力、子どもの頃から知っている歌の価値観をひっくり返してくれたスーザンさんの歌詞は、直訳するとこんなふうでした。

長い時の流れの先っぽにひっかかったまま、
私たちはいったい何者なんだろう、と
思い出している

この青い星は太陽のまわりをめぐり、回転する
静かな銀河をよこぎって 宇宙はひらいていく
地球という船は果てしない未知へと
そら宙の海を渡っていく

私たちの誰も、見知らぬ人であれ、友であれ、
敵ですらも 人生という旅の道づれ
生きること死ぬことを
終わりのないらせんのようにくりかえし、

進化していく

よろこびや悲しみ 笑い声や怖れを
ともにしながら
私たちは長いとしつき年月、
このいのちの学校で学んでいる

私たちの内なる宇宙は 生けるすべてのものを
抱きしめる
見いだす真のやすらぎ、心の平和は、
私たちからこそ、贈るべきもの
私たちの生きる場所は、ここ
私たちの生きるときは、いま
日がのぼり 日がしずむまで
わかちあった美しい日々 私は決して忘れない

なんて宇宙的なひろがりのある、深い意味のこめられた歌詞。School of life、いのちの学校、人生の学校、という言葉は、私にとってまるで紅茶の時間のことに思えて、日本語の歌詞をつけたい、と思ったのです。スーザンさんのものと詞にできるだけ忠実に訳して、書いた歌詞がこれです。

わたしは誰なの 想いだしてる
青い星はまわるよ 太陽のぐるり
銀河をよこぎり 宇宙はひらく
果てしない未知へと 空を航く船

旅する道づれ ひと他人も 敵も 友も
生と死 くりかえす 終わらないらせん
よろこび 悲しみ えがおや怖れ
わかちあうとしつき年月いのちのまなびや

内なる宇宙は いのち抱きしめ
こころの平和を 贈るよ あなたへ
今 ここを生きる とともに生きる
美しきこの日々 忘れはしない

自分で表現する

その後、スーザンさんに石川でお会いする機会があって、その時に訳詞のお許しを得て、2009年に

は金沢の「ピース9コンサート」で、紅茶仲間たちと歌うという大冒険までしました。

初めからそこまですよう、なんて大それたきもちはもちろんありませんでしたよ。スーザンさんの歌詞があまりにすてきで、訳した歌詞を自分流に口ずさんでいた頃、たまたま紅茶にやってきた親しい友だちのサワコさんに、「ね、ね、この歌とってもすてきなんだよ」と小声で最初の方だけ歌ってきかせたのです。すると彼女がまっすぐに私を見て、「スウさん、自分の思いは自分で表現しなくちゃね、ピース9で歌おうよ、一緒に歌うから」と大真面目な顔で。

彼女は以前から、保育士さん仲間と歌のグループをつくり、自分たちで歌を創作したり、歌ったり、時には小さなコンサートをひらいたりもしている人でした。その日、紅茶に初めてつれてきてくれた京都の友人のジュンコさんも、やはり歌でつながっているお仲間の一人。ジュンコさんも即、「うん、ぜひ。私がピアノ伴奏するから」と言ってくれ、あれよあれよの間に、紅茶仲間たちとステージで本当に歌うことになったのです。

この時からおつきあいのあったおかげで、「13条のうた」をつくった時にも、ジュンコさんが編曲と伴奏をしてくださり、彼女とつながる音楽仲間さんに録音を手助けしてもらって、無事「13条のうた」のCDをつくることができました。

歌のたねを蒔いたのは

ほんの数えるほどしかない私の歌づくり、けれどそのどれにも、表現したい、伝えたい、届けたい、という、強い「たい」があったこと、いつも必然があつてのことだったなあと、この日、福井で語りながら何度も思い出していました。

そういう考え方のたねを私の中に蒔いてくれたのは、さかのぼればおそらく、草の根

の人々の歌であるフォークソングを数多くつくり、長年歌い続けてきた笠木透さんだったのではないかなと思うのです。

娘が未満児保育園を卒園する日、親たちが歌った「私の子どもたちへ」。その時は誰の歌かも知らず、でも大好きな歌になり、折にふれささまざまな場面で歌っていました。その歌詞を書いた笠木透さんにはじめて出逢えたのは、それから10年近くたった1994年のこと。

その年、笠木透さんとそのお仲間、雑花塾のコンサートが石川県内何ヶ所かでリレーするように開かれ、紅茶の時間もその一会場になりました。夏休み中ということもあり、当日は大人よりずっと多い、町内4つの小学校から子どもたちがいっぱいやって来て、わが家は150人のお客さんたちで満員御礼。

暮らしの歌、大地の歌、権力に抗う歌、憲法の歌、平和の歌を、一緒に声出して歌う楽しさはもちろん、思いを表現するために自分で歌をつくること、自分たちの歌を持つことの、大きな意味とちからを、私はきっとあの頃からうっすら感じていたのでしょう。

写真は、笠木透さんたちの紅茶コンサート「あなたが夜明けをつげる子どもたち」の一場面を、雑花塾メンバーの岩田健三郎さんがスケッチしたものです。ベランダにも階段にも台所のカウンターにも、子どもたち、大人たちのお客さんがびっしり。うちの犬もベランダで聴いています。



その後、私は、精神障がいの人たちの働く東京調布のレストラン、クッキングハウスと出逢っていくのですが、そこにもすでに笠木さんが歌のたねを蒔いていたことを知りました。この場所のテーマソングでもある「不思議なレストラン」は、笠木さんからクッキングハウスへプレゼントした歌だったので

す。

クッキングハウスのメンバーやスタッフは、笠木さんや雑花塾メンバーから歌づくりを教えてもらい、今では何十曲もの作詞作曲オリジナルソングを持っています。自らの病を歌ったもの、クッキングハウスの日常を歌ったもの、仲間と働くよろこびを歌にしたもの、自分たちは平和のメッセンジャーだと歌う、平和の歌もあります。

クッキングハウスの記念コンサートでは毎回、十何曲もの歌が歌われますが、それらはすべてクッキングハウスのメンバー、スタッフたちが歌詞も曲もつくり、それを自分たちで表現する、誇らしい自前の歌たちです。

言葉を超えて共鳴しあう

トークタイムの最後は、「平和のひとかけら」の歌のことを。福島原発事故の後すぐ、金沢へ自主避難し、以来、金沢で暮らしているご夫婦と知りあってほぼ10年。その方がある時ぼそりと、「ふるさと」の歌はもう歌えない、あの歌詞がつらすぎてね、と。その一言をきっかけに、「ふるさと」のメロディに「平和のひとかけら」という歌詞をつけてみました。

きもちいつも言葉に あなたと語りあう
涙もえがおもわけあってきた
平和のたね 蒔きつつ

知らないことまなんで 平和のひとかけらに
心の自由もとめて 一歩まえへ あなたと

つないだ手のぬくもり 今もわたし はげます
平和の糸をつむいで 明日へわたす ギフトに
平和のたね 蒔きつつ

紅茶の時間でこれまでしてきたことをイメージして書いた詞だけど、特に、平和のひとかけら、のフレーズは、私自身のこうでありたいという願いなので、この歌を歌うといつもきもちが少し強くなる気がします。

この歌のことを話し終えると同時に、リビングスタジオの斉藤さんが、「それ、今、歌いましょう」とギターで伴奏をひきはじめました。それにあわせて福井チームの人たちも、なじみのある「ふるさと」のメロディにのせて「平和のひとかけら」を口ずさんでくれます。私にとっては思いがけないサプライズだったけど、これが「うたごえ」の文化なのですね。

時に歌は、しゃべり言葉以上にひとの間で共鳴しあって、きもちときもちをつなぎます。長年、ゴリラの研究で知られる京大総長の山際寿一さんが「我々は進化の過程で信頼を作るのに言葉だけに依存しませんでした。言葉を獲得するずっと以前から、きもちを伝えるのに一番いい装置は、人と人の間で共鳴しあう音楽だった」と。

長引くコロナの時代、生身のからだで共鳴しあう機会はたしかに減っているけど、ぶあつい雲で押しつぶされそうな閉塞感のその底で、今が今、あたらしい歌が生まれてくる。離れていても、ともに歌をつくり、歌いあう仲間がいる。歌は、私たち人間にとって、不要不急どころか、この息苦しい社会で自分らしく生きていくための、なくてはならない心の栄養と筋肉なのだ——その確かな実感が、この日の時間には満ちていました。

